

英雄叙事詩における馬の毛色について

—モンゴルとサハ（ヤクート）の場合—

D. 塔亜、 山下宗久

ユーラシアの言語文化を考えると、モンゴルとテュルクの関係に着目することは有意義である。本稿では、モンゴルの文化と、テュルクに属するサハの文化、それぞれの中で重要な位置を占める英雄叙事詩において、登場人物と馬の毛色がどのような関係にあるのか、その関係についてモンゴルとサハの間にはどのような共通点と相違点があるのかを考察する。作業に当たっては、モンゴルの英雄叙事詩をD. 塔亜が、サハの英雄叙事詩を山下宗久が担当した。

1. モンゴルの英雄叙事詩における馬の毛色

1.1. 分析の方法と問題点

今回、分析の対象にしたモンゴルの英雄叙事詩は、馬の毛色が明示されている169編のテキストで、11の地域に及ぶ（後ろの地図参照）〔註1〕。馬の毛色が明示されている箇所は、全部で749箇所あった。但し、一つの作品で同じ馬の毛色が繰り返し示されている場合は、一つと数えた。また、一人の英雄が、例えば、毛色の異なる三頭の馬に乗った場合は、三つと数えた。

馬の毛色名を、①一つの基本毛色名だけのもの、②二つの基本毛色名を組み合わせたもの、③斑紋や白徴を表す語を用いたものの三つに分類すると、全749例中、①が455例で最も多く、全体の60.8%を占め、②が96例（12.8%）、③が198例（26.4%）あった〔註2〕。

馬の毛色名は、地域によって異なる場合がある。例えば、内モンゴルのシリントグ地方で「ハリオン・ソルタイ・ハル（地色が黒毛で、長い剛毛が白みがかった黄淡色）」あるいは「シャルガル・ソルタイ・ハル（地色が黒毛で、長い剛毛が河原毛）」と呼ばれている毛色を、ハルハと内モンゴルの若干の地域では「ノゴーン」と言う。このように、同一の毛色を表す語が地域によって異なることがある。また、同一の語でも、地域によって異なる毛色を表すこともある。しかし、今までのところ、各地域に行って、馬の毛色とそれを表す語を照合する調査は行なっていないので、今回は、テキストに出てくる毛色の表す語をもとにして分析することにした〔註3〕。

それから、馬の毛色名の中には、英雄叙事詩だけに用いられるものがある。例えば、「バル・シャル・ツォーホル（黄色地に虎のような斑紋のある）」という語結合は、現在、日常では使われることがない。但し、「バル・ツォーホル（虎のような斑紋のある）」と「シャル・ツォーホル（黄色地に斑紋のある）」という語は日常的に使われる。

では、これから、上述の①②③に基づいて、順に分析を進めていくことにしよう。

なお、モンゴルの英雄叙事詩では、「美しい黒毛」「竹のような淡黄色の月毛」のように、馬の毛色名の前に修飾語の付く場合が多いが、修飾語は今回の分析の対象にできなかった。

1.2. 一つの基本毛色名だけのもの

英雄叙事詩の登場人物と、一つの基本毛色名だけで毛色が示されている馬の事例数との関係を、地域別に示したものが別表1である（但し、チャハルと内モンゴルのブリヤートは事例数が少ないので省略）。モンゴルの研究者の間でも、英雄の馬には黒毛がなく、英雄の敵の馬には白毛がないと考えられがちだが、実際のモンゴルの英雄叙事詩では、黒馬が英雄の馬に、白馬が敵の馬になり得ることが、表から読み取れる。さらに、モンゴル国のオイラトやバルガでは、英雄が白馬に乗る事例数より、敵が白馬に乗る事例数の方が多く、また、ハルハやバルガでは、敵が黒馬に乗る事例数より、英雄が黒馬に乗る事例数の方が多い。

基本毛色名を、別表の一番上の白毛から栃栗毛までの明色と、灰青色以下の暗色の、二つに分けてみると、明色が319例、暗色が136例あった。登場人物と馬の毛色の明暗との関係を調べると、以下のような結果になった。

登場人物	明色	暗色	明色の割合
A（主役の英雄）	168例	61例	73.3%
A'（脇役的な英雄）	35	12	74.4%
B（主役の敵）	72	54	57.1%
B'（脇役的な敵）	22	7	75.9%
C（英雄の花嫁）	18	2	90%
C'（英雄の花嫁の父）	3	0	100%

明色の割合が高いのはC'とCの馬、次いでB'、A'、Aの馬となっている。一般的に善は明色と、悪は暗色と結びつきやすいと考えられているが、モンゴルの英雄叙事詩では必ずしもそうはなっていない。なるほど、Bの馬の明色の割合は低くなっているが、AとA'の馬の明色の割合はB'のそれとほぼ同じになっているのである。但し、青海とハルハ、ホルチン、バルガ、バヤン・ノールでは、AとA'の馬の毛色はほぼ明色になっている。

基本毛色の中で最もよく使われている毛色は黒毛で、63例あった。そのうち、Aの馬が23例、Bの馬が27例あった。以下、栗毛57例（Aの馬27例、Bの馬18例）、淡黄色の月毛55例（Aの馬32例、Bの馬4例）、赤っぽい薄黄色43例（Aの馬23例、Bの馬12例）、河原毛42例（Aの馬19例、Bの馬5例）、栃栗毛40例（Aの馬30例、Bの馬8例）、白毛38例（Aの馬20例、Bの馬6例）、葦毛29例（Aの馬15例、Bの馬11例）などとなっている。

次に、馬の毛色を表すときに、一つの基本毛色名だけで表す事例数とその割合を、地域別に調べてみると、次のようになった。

新疆	175例	52.7%
モンゴル国のオイラト	88	55.3%
青海	19	67.9%
ハルハ	35	68.6%
ホルチン	21	75%
バルガ	40	72.7%
ブリヤート	60	82%
オルドス	6	60%
バヤン・ノール	7	77.8%

これを見ると、全体的な傾向として、馬の毛色を表すときに、東の方が一つの基本毛色名だけで表す割合が大きく、西の方が小さいことがわかる。つまり、東の方、とりわけ定住しているモンゴルでは、毛色の認識の仕方が西の方より単純になっていると言えよう。

1.3. 二つの基本毛色名を組み合わせたもの

登場人物と、二つの基本毛色名を組み合わせて毛色が表されている馬の事例数との関係を、地域別に示したのが別表2である（オルドスとバヤン・ノール、チャハル、内モンゴルのブリヤートは事例がなかったので省略）。ここで、先ほどと同じように、二つの基本毛色名を組み合わせたものを、明色と暗色の二つに分けると、明色が59例、暗色が37例あった。また、登場人物と馬の毛色の明暗との関係を調べると、以下のような結果になった。

登場人物	明色	暗色	明色の割合
A（主役の英雄）	27例	18例	60%
A'（脇役的な英雄）	3	1	75%
B（主役の敵）	18	12	60%
B'（脇役的な敵）	3	4	42.9%
C（英雄の花嫁）	4	2	66.6%
C'（英雄の花嫁の父）	4	0	100%

B'の馬の明色の割合が、一つの基本毛色名だけの場合と比べると、低くなっている。それにしても、Aの馬の明色の割合がBのそれと同じなのは、意外な結果である。

二つの基本毛色名を組み合わせたものの中で、最もよく使われている毛色は「黒毛・鹿毛」で、27例（Aの馬13例、Bの馬11例）あった。以下、「灰青色・茸毛」12例、「淡黄色・鹿毛」11例、「黒毛・粕毛」7例、「黒毛・灰色」5例などとなっている。

次に、馬の毛色を表すときに、二つの基本毛色名を組み合わせて表す事例数とその割合を、地域別に調べてみると、次のようになった。

新疆	49例	14.8%
モンゴル国のオイラト	31	19.5%
青海	1	3.6%
ハルハ	6	11.8%
ホルチン	5	17.9%
バルガ	1	1.8%
ブリヤート	3	4.1%
オルドス	0	0%
バヤン・ノール	0	0%

これを見ると、全体的な傾向として、周辺部の部族では、馬の毛色を表すときに、二つの基本毛色を組み合わせる割合が小さいことがわかる。但し、新疆とホルチンは例外である。

1.4. 斑紋や白徴を表す語を用いたもの

モンゴルの英雄叙事詩の中で、斑紋や白徴を示す語として用いられているものには、ツォーホル、駁馬、ハルタル、流星がある。ツォーホルとは、馬全体に大小様々な斑紋があるもの、ハルタルとは、頬、口の周囲、股のあたりに黄色っぽい、あるいは白っぽい紋があるもの、駁馬とは、ツォーホルやハルタルよりも大きな白斑のある馬、流星とは、星が流れるような線状の白徴を指す〔註4〕。登場人物と、斑紋や白徴を示す語によって毛色が表されている馬の事例数との関係を、地域別に示したものが別表3である（但し、ホルチン、バヤン・ノール、内モンゴルのブリヤートは事例数が少なく、チャハルは事例がないので省略）。

斑紋や白徴を示す語が用いられる事例数を見ると、ツォーホルが80例で最も多く、次いで流星が75例、駁馬が27例、ハルタルが16例となっている。斑紋や白徴を表す語が単独で用いられる事例数は52例で、基本毛色名と組み合わせられる場合の146例の、約3分の1にすぎない。特に、流星が単独で使われる事例数はわずか2例である。このことから、斑紋や白徴を表す語は、本来、単独で使われるとどんな毛色かわからないので、基本毛色名と組み合わせられていたとすることができよう。

しかし、実際の事例の中で最も多いのはツォーホル単独で、29例あった。以下、「黒毛・流星」25例、「淡黄色・ツォーホル」14例、「バル・淡黄色・ツォーホル」と「茸毛・流星」が13例〔註5〕、駁馬単独が12例などとなっている。

登場人物と、斑紋や白徴を表す語が用いられる事例数との関係を調べると、次のような結果になった。

登場人物	ツォーホル	流星	駁馬	ハルタル
A (主役の英雄)	7例	27例	12例	2例

登場人物	ツォーホル	流星	駁馬	ハルタル
A' (脇役的な英雄)	7 例	8 例	2 例	4 例
B (主役の敵)	5 7	2 8	1 3	1 0
B' (脇役的な敵)	6	8	0	0
C (英雄の花嫁)	2	3	0	0
C' (英雄の花嫁の父)	2	0	0	0

これを見ると、Aの馬の中では流星が最も多いのに対して、Bの馬の中ではツォーホルが最も多いことがわかる。

次に、馬の毛色を表すときに、斑紋や白徴を示す語を用いて表す事例数とその割合を、地域別に調べてみると、以下のようになった。

新疆	1 0 8 例	3 2 . 5 %
モンゴル国のオイラト	4 0	2 5 . 2 %
青海	8	2 8 . 6 %
ハルハ	1 0	2 %
ホルチン	2	7 . 1 %
バルガ	1 4	2 5 . 5 %
ブリヤート	1 0	1 3 . 7 %
オルドス	4	4 0 %
バヤン・ノール	2	2 2 %

これを見ると、西の方で割合が大きくなっているのが目に付く〔註6〕。

2. サハの英雄叙事詩における馬の毛色

手持ちのサハの英雄叙事詩のテキストや梗概で、馬の毛色が明示されているものは全部で35編あった。英雄叙事詩の登場人物が何色の馬に乗るのかをまとめてみたのが以下の表である。

	A	A'	B	B'	C
白毛	7	6			
乳白色	2	7			
頭部が白毛	1	1	1		
銀色	1				
月毛	1				1

	A	A'	B	B'	C
明るい栗色	4				
淡黄色			2	1	
栗毛	4	1			
鹿毛		1	1		
枳栗毛				1	
灰色	3	1			
粕毛		1			
葦毛・灰色	1				
黒毛	3	1	3	2	1
駁馬			2		
まだら	1	1	3		
赤・まだら			2		
黒・まだら	1				
明色の割合	74%	84%	43%	25%	50%

この結果をモンゴルの英雄叙事詩における馬の毛色と比較すると、次のことが指摘できる。

- (1)サハの英雄叙事詩では、白毛と乳白色が英雄の馬にしか見られない。また、英雄の馬の明色の割合は、敵の馬の明色の割合よりもずっと高い。このことから、サハの英雄叙事詩は、モンゴルの英雄叙事詩に比べると、より明確に、善は明色と、悪は暗色と結びついていると言えよう。但し、黒毛については、モンゴルと同様に、敵の馬だけではなく、英雄の馬にも見られる。
- (2)登場人物と、斑紋を表す語が用いられる事例数との関係を見ると、Bでその回数の多いことがわかる。これは、モンゴルの英雄叙事詩で、Bの馬にツォーホルが多いのと共通することである。
- (3)サハの英雄叙事詩では、馬の毛色を表すときに、二つの基本毛色名を組み合わせることが極めて少ない。
- (4)白毛が英雄の馬にしか見られないことは、新疆や青海、ハルハ、ホルチンと共通する。また、淡黄色が敵の馬にしか見られないことは、モンゴル国のオイラトと共通する。
- (5)サハの英雄叙事詩では、明るい栗色、栗毛、灰色は英雄の馬にしか見られないが、モンゴルの英雄叙事詩では、これらの色は敵の馬にも見られる。

ところで、モンゴル語とサハ語の間には、馬の毛色を表す語の中に類似する語がいくつかあるので、それを示しておこう。但し、類似する語が全く同じ毛色を表すのかは、今後、確かめる必要がある。

モンゴル語	サハ語	日本語
цагаан	маҕан, манган	白毛
хуа	кугас	明るい栗色
хүрэн	күрэнг	栃栗毛
хөх	күөх	灰青色
саарал	саарыл, саалыр	灰色
буурал	буурул, буулуур	粕毛
бор	боронг	葦毛
хар	хара	黒毛
цоохор	чуоҕур	まだら

それから、これは馬の毛色に直接関係することではないが、サハの英雄叙事詩では、英雄の敵が馬ではなく、牛や牛轡に乗ることがよくある。その牛はまだらであることが多い。また、サハの英雄叙事詩にしばしば登場するアルジャマーン・ジャルジャマーンというトゥングースの英雄は、トナカイに乗ったり、スキーで移動したりする。一方、モンゴルのハルハ、ホルチン、バルガ、オルドスの英雄叙事詩では、敵は馬ではなく、ロバに乗ることがある。また、新疆、バルガ、内モンゴルのブリヤートの英雄叙事詩では、敵はラバに乗ることがある。ラクダは、新疆の英雄叙事詩では、英雄の花嫁がよく乗るが、ホルチンの英雄叙事詩では、英雄の敵が乗る。なお、牛については、モンゴルでは、ハルハの英雄叙事詩で英雄の敵が乗るという1例が見られるだけである。しばしばサハとの関係が論じられているブリヤートではなく、ハルハで牛の事例が見られるのは、興味深いことである。

今後の課題としては、まず、サハの英雄叙事詩における馬の毛色のデータ数を増やすことが挙げられる。そうすれば、モンゴルとの比較がより精緻なものになるであろうし、サハの居住する地域の間で何らかの差異が見られるのかが明らかになるであろう。

それから、登場人物と馬の毛色との関係を、詩の韻律の側面から調べてみる必要があると思う。例えば、サハの英雄叙事詩『片意地なクルン・クッルストゥール』では、次のような語句が繰り返し用いられている。

Кутуругунан оонньуур	尻尾でたわむれる
Кунньалык Куйаар кугас аттаах	少し丸くて、明るい栗色の暴れ馬を持った
Куруубай Хааннаах	片意地な性格をした
Кулун Куллуштуур	クルン・クッルストゥール

ここではkの音で頭韻を踏むために、馬の毛色名の中から、кугас（明るい栗色）という語が選ばれたと考えられる。このような現象は、モンゴルの英雄叙事詩においても見られる。

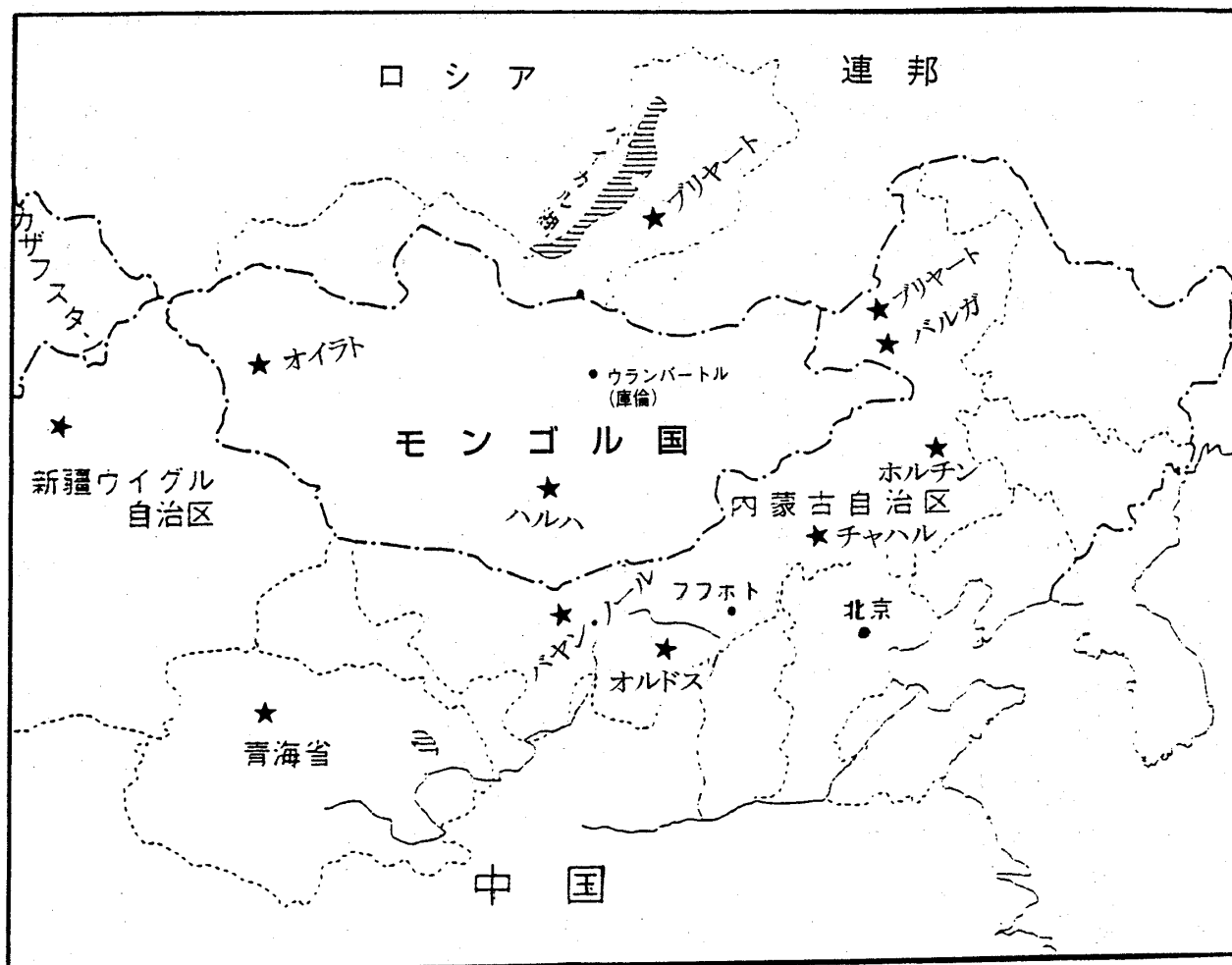
いつも、頭韻を踏むために、馬の毛色名が選択されるわけではないが、上のような事例は時々見られるので、今後、留意する必要があるだろう。

[註釈]

1. 169編の地域別内訳は、多い順に、新疆33編、ハルハ32編、モンゴル国のオイラト31編、バルガ27編、青海18編、ホルチン13編、オルドス5編、ブリヤート4編、バヤン・ノール3編、内モンゴルのブリヤート2編、チャハル1編となっている。
2. 全749例の地域別内訳は、多い順に、新疆332例、モンゴル国のオイラト159例、ブリヤート73例、バルガ55例、ハルハ51例、青海とホルチンがそれぞれ28例、オルドス10例、バヤン・ノール9例、内モンゴルのブリヤート3例、チャハル1例となっている。
3. 馬の毛色を表すモンゴル語を日本語に訳すに際しては、『騎馬民族の心 モンゴルの草原から』（鯉渕信一著、1992年、日本放送出版会）を参照した。
4. 鯉渕信一『騎馬民族の心 モンゴルの草原から』、p. 155-157.
5. 別表3から「バル・淡黄色・ツォーホル」の13例はすべて、新疆の英雄叙事詩に見られることがわかる。
6. 3人のモンゴルの英雄叙事詩の語り手に、それぞれの馬の毛色に対してどのようなイメージを持っているのか尋ねたところ、次のような結果が得られた。なお、表中のaはモンゴル国のオイラトの語り手、bは内モンゴルの語り手、cは新疆の語り手、○は良いイメージ、×は悪いイメージ、△はその中間、◎はとても良いイメージ、？はよくわからないを表す。

	a	b	c
白毛	○	○	×
月毛	△	△	×
明るい栗色	○	△	△
赤褐色の鹿毛	△	△	△
淡黄色	△	？	？
淡黄色の月毛	○	○	○
河原毛	△	△	△
赤っぽい薄黄色	△	△	△
白みがかった黄淡色	○	△	△
栗毛	△	？	○
鹿毛	△	○	○
赤毛	○	△	○

	a	b	c
栃栗毛	○	△	○
灰青色	△	?	?
灰色	△	△	△
粕毛	△	?	?
葦毛	△	○	○
黒毛	○	△	?
流星	△	△	◎
ハルタル	△	△	△
駁馬	?	△	△
ツォーホル	×	?	×



別表1

	新疆	モオ	青海	ハルハ	ホ	バルガ	ブ	オ	バ
	AA'BB'CC'	AA'BB'CC'	AA'BC'	AA'BB'C'	AA'BC'	AA'BB'C'	AA'BCC'	AA'BB'	AA'
白毛	55	115	22	2	5 1	1 2	4 1	1	
月毛						1			
明るい栗色	1					1 1			
赤褐色の鹿毛	1	1 1	2			2			
淡黄色		2							
淡黄色の月毛	10321 3	3111	2 1	2 1	1	7 1	51114	11	1
河原毛	212211	1023213	2	1	12	41	1		
赤っぽい薄黄色	1127	3 2	2	4	11	1	5 1		12
白みがかった 黄淡色	1	1					1		
栗毛	1619	6432		2 2		1	216 2		
鹿毛	2 21	121	1		11		3		
赤毛	5 3	1			1	1 1			
栃栗毛	8253	5 1		5121		5		1	1
灰青色	1 2	21				2	712		
灰色	3 41			1	2	2 1		1	1
粕毛	311	1				1			
葦毛	823	1	111	3 1	1		1 6	1	
黒毛	11 152	5 43 1	3 1	212	12	12 1	13	1	

A: 主役の英雄 A': 脇役的な英雄 B: 主役の敵 B': 脇役的な敵

C: 英雄の花嫁 C': 英雄の花嫁の父

モオ: モンゴル国のオイラト、ホ: ホルチン、ブ: ブリヤト、オ: オルドス、バ: バヤンノール

別表 2

	新疆	モ・オ	青	ハ	ホ	バ	ブ
	AA'BB'CC'	AA'BB'CC'	A	AB	BB'	A	A
白毛・明るい栗色		1					
月毛・明るい栗色	1	1					
白毛・赤褐色の鹿毛				1			
赤っぽい薄黄色・ 淡黄色	1						
鹿毛・淡黄色の月毛	1						
金・河原毛	1						
白みがかった黄淡色・ 河原毛							1
白毛・河原毛		1					
赤毛・赤っぽい薄黄色	1						
黒毛・赤っぽい薄黄色			1				
赤褐色の鹿毛・栗毛		1					
赤毛・栗毛	1 2 1						
栃栗毛・栗毛							1
淡黄色・鹿毛	4 1 3	1 1		1			
赤毛・鹿毛	1 1					1	
黒毛・鹿毛	3 4	9 7 2 1		1			
栃栗毛・赤毛	2						
白毛・灰色					1		
灰青色・灰色					1		
葦毛・灰色					2		
黒毛・灰色	1 2	1			1		
黒毛・栃栗毛	1						
栗毛・葦毛	1						
赤毛・葦毛				1			
灰青色・葦毛	4 1 1	2 1 1		2			
黒毛・葦毛		1					
明るい栗色・粕毛	1						
赤毛・粕毛	3						
黒毛・粕毛	3 3						1

モ・オ: モンゴル国のオイラト、 青: 青海、 ハ: ハルハ、 ホ: ホルチン、
バ: バルガ、 ブ: ブリヤト

別表 3

	新疆	モ・オ	青	ハルハ	バルガ	ブ	オ
	AA'BB'C'	AA'BB'CC'	A'B	AA'BB'	AA'BB'	A'BC'	AB
流星・淡黄色の月毛	1						
流星・栗毛	1						
流星・柎栗毛	1						
流星・黒毛	1						
流星	1		1				
赤っぽい薄黄色・流星	1						
明るい栗色・流星	1 3						
栗毛・流星	1 1		1				
柎栗毛・流星	4 1 1	2 1 1					
粕毛・流星	3 1	1					
灰青色・流星	5 1 1	1					
葦毛・流星	2	4 2 2	1	2			
黒毛・流星	1 12 2	1 1 2 3	1	1			
ハルタル	2 3 2				1 1		
赤褐色の鹿毛 ハルタル					4		
灰青色・ハルタル	1				1		
駁馬	4 2 4	1			1		
淡黄色・駁馬	2						
赤っぽい薄黄色・駁馬	1						
鹿毛・駁馬		1			1		
赤毛・駁馬							1
灰青色・駁馬	2	1					
葦毛・駁馬	2						
黒毛・駁馬	3						1
ツォーホル	2 1 5 1	5 2	2	2	1 2 1	1 1	
淡黄色・ツォーホル	1 6 1	3	1			2	
赤っぽい薄黄色・ ツォーホル			1				
鹿毛・ツォーホル				1			
赤毛・ツォーホル	1						
柎栗毛・ツォーホル	1	2 1					
灰青色・ツォーホル						1	
葦毛・ツォーホル		1					
黒毛・ツォーホル		1		1 2 1	1	1	1
流星・ツォーホル						1	
雑色・ツォーホル						1	
駁馬・ツォーホル						1	
虎・ツォーホル	1						1
虎・淡黄色・ ツォーホル	13						
柎栗毛・淡黄色・ ツォーホル	1	1					

(だわー たやー・中国内モンゴル大学モンゴル学研究院在職博士課程)
(やました むねひさ・千葉大学社会文化科学研究科)